

## 中国電影大觀



## 哀戀花火

## (炮打雙燈 / Red Firecracker Green Firecracker)

2007(平成19)年11月4日鑑賞(シネ・ヌーヴォ)

監督=何平 / 出演=寧靜 / 巫剛 / 趙小銳 / 高陽 / 徐正運 / 王麗媛 / 趙亮 (東光徳間配給 / 1993年中国、香港映画 / 117分)

……「学院派」に対する何平監督のエンターテインメント色豊かなこの作品は、魅力いっぱい！ 第1に、大胆那として老舗の爆竹店を守るヒロインと、放浪のアーティストとの恋の行方に注目。第2に、黄河のほとりで展開される美しい花火の情景に注目！ それにしても、ナシ族の血を引くという、あの美女寧靜は今どこに……？

## 舞台は黄河のほとり

この映画では、陳凱歌監督の『黄色い大地』(84年)ほどではないが、「黄河」が舞台設定とストーリー構成に大きなウエイトを占めている。私が黄河をはじめて見学したのは、2005年10月の山東省ツアーの時に、上流とは大きく異なる下流のたおやかな流れが印象的だった。

しかしこの映画を観ると、黄河は冬と春で印象が全く違うことがよくわかる。この映画の一方の主人公である絵師の牛宝(巫剛)が黄河のほとりにあるまちにやって来たのは、黄河に氷が張り、船がそれ以上進めなくなったため。さて、それが彼の運命にどのような影響を……？

## 時代は清朝末期、ヒロインの大胆那は……？

時代は清朝末期。この映画では、最初に男の声のナレーションと女の声のナレーションが入り、それぞれ自分の立場が語られる。男の声はもちろん牛宝だが、女の声のナレーションによると、彼女は小さい頃から若旦那と呼ばれており、そして父親が

亡くなった19歳の時から大旦那と呼ばれるようになったらしい。その大旦那ことチュンチー ニン・チン春枝（寧静）は、300年間にわたって続いている爆竹の老舗ツァイ蔡家の男装の女主人。この女主人を演じる寧静は『哀戀花火』でデビューした女優だが、私は『中国映画の全貌2000』という、今や私の中国映画のバイブルとなっている本を購入した時、チアン・ウェン コン・リー姜文、鞏俐ニン・チンに続いて3番目に載っている美人女優として注目しながら、『上海グランド』（96年）も『哀戀花火』も観ていなかった。

ネット情報によれば、彼女は少数民族ナシ族の血を引くエキゾチックな容姿でCFモデルやTVドラマで活躍したのち、本作に抜擢されたとのこと。そこで、まず私としては、大旦那と称されるそんな女主人の美貌に注目！

### 原題は、原作そのままだが……

ネット情報によれば、この映画の原作は伝奇物語を得意とする中国の現代作家フォン・チーツァイ馮驩ター・イン才の短編小説『炮打雙燈』。その原作を大鷹が脚色したのだが、映画の原題はそのまま『炮打雙燈』にしたとのこと。そしてそれは、「赤と緑の火を放つ爆竹花火の名称で、中国の“紅男緑女”（きれいに着飾った男女の意）という言葉と符合し、幸福を祈る意味をもつ」とのこと。

たしかに、この映画は爆竹の音と光が大きな特徴だが、それは爆竹問屋の老舗の女主人をヒロインにしているのだから、ある意味当然のこと。そう考えると、この映画に関しては、『哀戀花火』という邦題はこの映画の本質にフィットしているうえ、わかりやすい日本語となっている。したがって、私を含めて、むしろ原題より邦題の方がいいと思う人も多いのでは……？

### 何平監督に注目！

私は何平フー・ピン監督の作品は『ヘブン・アンド・アース』（03年）しか観ていないが、この『哀戀花火』は何平フー・ピン監督の第4作。何平監督は1957年生まれだから、張藝謀チャン・イーモウ監督や陳凱歌チェン・カイコー監督ら第5世代監督と同世代。しかし、「学院派」と呼ばれる彼らとは一線を画した映画づくりに専念しているらしい……？

ネット情報によれば、「20歳で映画界入りしたのちに豊富な現場経験を積んだフー・ピンならではのエンターテインメント指向と躍動感溢れる映像、ストーリー・テリングの妙などが見どころ」とのこと。たしかにこの映画では、そんな何平フー・ピン監督が顕

著だし、『ヘブン・アンド・アース』でも中井貴一の『日記「ヘブン・アンド・アース」中国滞在録』によれば、撮影は超過酷だったらしいが、エンターテインメント性いっぱい映画だった。

「学院派」に対して、何<sup>フー・ピン</sup>平監督を何派というのか知らないが、私が勝手に名づけるとすると大衆派……？

## アーティストの値打ちは……？

考えてみれば、いつの時代も才能あるアーティストは先駆的思想の持ち主が多い。それは、既成の概念や価値観にとらわれず、自由な発想を貫くのがアーティストの生命線であるため……。そう考えれば、清朝末期の中国という超保守的な時代状況の中に、牛宝<sup>ニウバオ</sup>のようなカネや権力はもちろん、その他の何物にも束縛されず、自由に生きるアーティストがいたというのはすごいこと……。しかし他方、いくら才能豊かであっても、時代がそれを受け入れてくれないければ、そのアーティストは結局生計を立てることができず、惨めな一生を送るだけ……？

その点、絵師として活動している牛宝<sup>ニウバオ</sup>は、小さい時に両親と死に別れ、絵を描いているおじさんを真似する中で絵の技術を学んだというから、格別「前衛芸術」を標榜するのではなく、その時代の誰もが理解できる絵を描いていたよう。そのため、彼の絵は比較的誰にでも認められていたらしい。また、たまたま<sup>ツァイ</sup>蔡家の正月に広大なお屋敷のたくさんの門を飾る神サマの絵をそれまでずっと描いていた絵師が、年のため手が震えて描けなくなったというのは、牛宝<sup>ニウバオ</sup>にとってはラッキーな時の運……。？

といっても、自分の才能に自信満々の絵師である牛宝<sup>ニウバオ</sup>にとっては、<sup>ツァイ</sup>蔡家から仕事をもらうことに格別の価値があったわけではなく、単に面白そうだと思っただけ。

しかし、牛宝<sup>ニウバオ</sup>がそんな風に誰にでも理解しやすいアーティスト（絵師）だったということが、<sup>ツァイ</sup>蔡家の大旦那<sup>チュンチー</sup>春枝が彼の絵に興味を示した最大の理由……。？

## 蔡家の掟は……？

<sup>ツァイ</sup>蔡家は300年も続いた爆竹の老舗だから、黄河の両岸にある屋敷、工場は広大なもの。その広さは、三日三晩歩いてはまだ敷地の中というほどだ。もっともこれは、白髪三千丈という中国特有の誇大表現かもしれないが、スクリーン上で観る限りその広大さは十分実感できる。

そんな蔡家にとって男の継承者がいないのは何とも不幸な事態だが、蔡家には「当主は嫁に行ってはならない」という重大な掟があった。そのため、春枝は男装で当主としての日々の業務をこなしていたが、この大旦那は実権をもった代表取締役ではなく代表権は名目だけ。すなわち実務については、家は執事の趙（高陽）が、店は支配人の徐（徐正運）と工場長の満番頭（趙小銳）が仕切っていた。

これだけの大旦那になると、ムコに誰がなるのかが大問題だが、その選択は難しい。ふつうは取引先を含めて外部の男を探すはずだが、映画の中ではそういう気配は全くない。他方、内部の人材を登用するとなると、その候補者は工場長の満番頭くらい……？ まさか、流れ者のアーティストがムコ候補になることはないはずだが……。

## 当主として生きるか？ それとも女として生きるか？

女は自由な生き方をするアーティストに弱い動物……？ この映画を観ているとそう思わざるをえない。とりたててハンサムでもないのに牛宝が魅力的なのは、春枝には決して許されない自由な生き方であったことは明らか。したがって、怪しげな雰囲気を感じた満番頭が「お前、何をしたんだ！」と問い質したのは当然だが、それに対する牛宝の答えは「寝たんだヨ」という何とも直接的なもの。こりゃ、大騒動が起こらないはずがない。

さて、春枝は当主として生きるのだろうか……？ それとも女として生きるのだろうか……？ そこから生まれてくる多少子どもじみたケンカも含めた面白いストーリー展開は、じっくりとあなたの目で。

## 戻ってきた牛宝は爆竹師に

一時的に恋の炎に燃えさかったとしても、やはり当主の座を無責任に放棄できないのは自然の流れ。しかし、春枝の心の中に大きな葛藤があったのは当然。そんな場合、ふつう女は当主として生きていく決心を固めてしまうと、牛宝のことはキッパリ忘れてしまうもの。

そう思っていたところ、牛宝が爆竹師として修行を積んで、再び春枝の花婿候補として蔡家に乗り込んできたのにビックリ。そしてさらにビックリしたのは、春枝が牛宝への思いを断ちきってなかったこと。こりゃ、またお家騒動の再発か……？

## 勝負は爆竹合戦で……

しかし、さすがに蔡家<sup>ツァイ</sup>の長老たちもバカではない。そこで出された知恵は、爆竹合戦によって春<sup>チュンチュー</sup>枝の花婿を決しようという合理的なもの。もっとも、映画を観ている私たちには、この爆竹合戦がどんなルールで行われ、どうやって勝敗を決するのか全くわからないのが難点。しかし、そんな難しいことを言わなくても、スクリーン上で展開される爆竹合戦の美しさにはただうっとり。もっとも、こりゃかなり危険そうで、少しでも手違いがあれば命の危険が……。そう思っていると案の定……。

これ以上のネタバレはヤバイので紹介はこれまでとするが、女のために命を懸けた2人の男の情熱と爆竹合戦の映像の美しさをじっくり味わいたいものだ。

2007(平成19)年12月1日記

### ミニコラム

#### SHOW-HEY とゆく『胡同の理髪師』



人力車での什刹海公園「胡同めぐり」  
料金 1時間2人で100円也。



前海沿いの焼肉屋「焼肉季」前。チャン老人のモツ料理屋“爆肚張”はこのすぐ近く……？

2008(平成20)年4月7日